

## 「ハクナマタタの国から学んだこと～ケニアの人々と環境～」

青年海外協力隊（15-3 ケニア 環境教育）

魚谷未夏

### 1. 自己紹介

兵庫県神戸市で生まれ育ち、中学2年生の時に協力隊としてアフリカに行くことに決める。昆虫生態や環境教育を学んだ後、社会人を経て、2004年4月から2年間、ケニアのキスム博物館に環境教育隊員として赴任。帰国後は静岡県にある環境改善活動を実践しているNPOに勤務。

現 JICA 大阪国際センター 国際協力推進員 滋賀デスク

### 2. ケニアの概要

面積：58.3万平方キロメートル 人口：3,750万人（2007年：世銀）

首都：ナイロビ（Nairobi）

言語：スワヒリ語・英語・他42言語

民族：キクユ族、ルオ族、マサイ族など42部族

主要産業：紅茶、コーヒー、綿花、トウモロコシなどの農作物

経済成長率：7.0%



### 3. ケニアの食から

お肉屋さんはありません、スーパーでは袋に入った冷凍の肉を買うことはできるが、多くの村では、羊やニワトリを自分たちでさばき、食べている。

肉は毎日食べることはできない。

我々は生き物を殺して生きている。「生き物を殺してはいけない」ということを教えるのではなく、生き物を殺して食べることにより、私たちが生かされているということを感じる事が大切。

ケニアの人たちの環境に対する意識は、高いとはいえない。

動物愛護的な感覚はあまりない。

### 4. ケニアの環境問題

- ・ ゴミ問題
- ・ 野生動物種の減少（生息地の減少や移入種の影響（ヴィクトリア湖のナイルパーチ）

など様々な問題

### 5. 活動概要

赴任先：キスム博物館

要請内容：スクールトリップで博物館を訪れる子ども達に対して、環境問題に関するワークショップなどの企画立案と実践。

- ・ ゴミ問題に関して（3Rを学ぶワークショップ・Clean Up DAYの開催）
- ・ 生物多様性に関して（昆虫から、植物と動物との関係を学ぶ）
- ・ 展示物の作成 など

6. 自然と人間の軋轢（ツァボ国立公園の事例から）

ゾウの数：1970年代 16万頭 → 2005年 2万8千頭

人口：1,094万人 → 3,200万人

人口が増加 → ゾウの生息地に人間が居住し始める → 生息地の減少 → 人間を襲う  
アフリカも日本も同じような問題がある。

人間の経済活動と環境保全は相反するものであるかもしれないが、どこで折り合いをつけるかを地域の住民と共に考えていかなければならない。

「一通の手紙」

我々がこの土地を奪われるのは時代の流れ。  
そして運命だから決してあなた達を恨まない。  
しかし1つだけ約束してほしい。

我々先祖が守ってきたこの大地を汚す事だけはしないでほしい。

我々が今生きていられるのはこの大地のおかげであって、  
それを汚すことは

我々の先祖達すべてを裏切ることになるから

【ネイティブアメリカンの酋長が、  
土地を奪われる際、大統領宛に送った手紙】

ナイロビの街並み



伝統的なルオ族の家屋



町中にはゴミが一杯



子ども達と一緒にゴミ拾い





古紙から紙漉を実施



昆虫採集



街の近くに生息していたヒョウ



木がなくなってしまった山



ゾウの群れ (ツァボ国立公園)



ゾウに荒らされた農耕地



ゾウの糞で紙漉を実施



シマウマを食べるライオン (マサイラ国立公園)

